

JCA NEWS



Japan Communication Association (JCA) Newsletter

日本コミュニケーション学会ニュースレター



CONTENTS

1. 巻頭言	1	6. 広報局便り	17
2. 私にとってコミュニケーション学とは	3	7. 支部ニュース	19
3. 2022年度 第2回理事会報告	6	8. マイページ登録のお願い	23
4. 学術局からのお知らせ	14	9. 編集後記	23
5. 事務局報告	15			

132
2023.2

巻頭言

JCA と共に歩む

日本コミュニケーション学会東北支部長

會澤 まりえ (尚絅学院大学人文社会学群教授)



今考えると、それは不思議な出会いでした。実は、大学卒業後に千葉県立高等学校の英語教諭として赴任しましたが、その年の英語教員初任者研修会の講師は本学会元会長の故石井敏先生でした。当時は、日本コミュニケーション学会があるということさえ知らずに先生のご講演が終わった後に、「英語と日本語の知覚の違い (perception gap) をどのように教えますか。」と質問したことを覚えています。これが石井先生との最初の出会いです。

その2年後に、コミュニケーションを深く勉強したいと思いコミュニケーションの研究で有名だったアメリカのノースウェスタン大学大学院に留学しました。そして、スピーチ・コミュニケーション学を1982-83年に学びました。しかし、履修したかった「異文化コミュニケーション」の科目はなく、大学院のアドバイザーに聞くと、異文化コミュニケーションの研究はある程度やり尽くされ結論が見えているからだといわれました。また、対人コミュニケーション学専門の教授からは、最初は異文化的要素も大切かもしれないが、最終的には対人コミュニケーションの要素の方が重要になるともいわれました。しかし、その当時の日本はまだ異文化コミュニケーションの知識を必要としていたと思います。

数年後に日本コミュニケーション学会の存在に気付いて入会しました。初めて参加した年次大会は1987年に東京で開催され、そこで石井敏先生と再会することになりました。石井先生もノースウェスタン大学大学院でスピーチ・コミュニケーション学を学ばれたという事を知ったのはその時でした。これも何かの縁と思わざるを得ません。初めての年次大会で研究発表をした後に、質疑応答で難しい質問を受けて答えに窮していると、理事メンバーの方が助け舟を出してくれました。新入会員を理事メンバーが見守り育てるという雰囲気があり、初めての学会、初めての研究発表でしたが本学会にとっても良い印象を持ちました。

その後、「まだ東北で一度も年次大会を開いたことがない」と理事メンバーから言われて、宮城県名取市に立地する勤務校で1991年に年次大会を開催しました。大会委員長にはなったものの、職場ではまだ専任講師。勤務校で協力してくれる人も少なく、ほぼ一人で受け入れ体制を整えました。しかし、一旦年次大会が始まると国内は元より海外からも多数の参加者が来て下さり、キャンパスは途端に賑やかになりました。この大会をきっかけに東北支部会員が増え、その2年後の1993年には東北支部が北海道・東北支部から独立し、東北6県に新潟県を加える形で立ち上がりました。

支部創立当初の会員は、秋田県に1名と宮城県に数名という状況で、研究会を開催しても数名しか集まらないこともありましたが、しかし、人数という「量」ではなく、研究の「質」を高めていこうと思い、少人数でも毎年2回の研究会を続けてきました。その間、2004年の新潟中越地震、2011年の東日本大震災、台風、豪雨、洪水など数々の自然災害を経験しました。災害が起きるたびに支部メンバーは、真っ先に被害がなかったかどうかを確認し合っています。コミュニケーションの中で最も大切なお互いを気遣うという、共感のコミュニケーション“Empathetic Communication”が本支部には根付いています。2023年に本支部は創立30周年を迎え、記念誌を発行する予定です。継続は力なりということを信じ、これからもJCAと共に歩んでいきたいと思っています。

私にとってコミュニケーション学とは



高永 茂 (広島大学大学院人間社会科学研究科 教授)

私は学部、大学院の時は言語学を勉強していました。その後、興味が医療コミュニケーションに移っていき現在に至っています。気になっていることをいくつか取り上げて、何を考えながら研究者として過ごしてきたか振り返ってみたいと思います。

最初に、医療コミュニケーションの研究をしていて言語学の研究と決定的に違う点があることに気づきました。「語用論」に、発語行為、発語内行為、発語媒介行為という用語があります。話者が発話してから他者に言語行為を及ぼすまでの過程を三段階で表現したものです。授業で語用論の話をするとき、「言語学は発語内行為を中心に研究してきました。なぜならば言語学者は発語媒介行為とその後の効果には責任が持てないからです（責任を持つ必要がないからです）」といった説明をしています。語用論で研究の中心になっているのは、依頼や命令、皮肉といった言語表現がいかなる（言語的な）手段で達成されるのかを明らかにすることだと思います。発話としてあらわれる表現と言語行為としての「発話の力」とのズレにはとても興味深いものがあります。語用論の中で完結している時にはそれはそれでいいのですが、いざ他分野に出て行くことになると事情が変わってきます。医療コミュニケーションではよく「行動変容」ということが言われます。コミュニケーションを通じて患者さんが（望ましい方向に）行動を変えてくれなければ意味がないからです。つまり、発語媒介行為とその後の効果が重要だということです。医療コミュ

ニケーションの現場では、実際に行動変容が起きたのか起きなかったのかが問われます。この点で、語用論だけを研究していたときとは別のプレッシャーを感じています。

つぎに、言語学を勉強した人は、最初に「記号」とは何かということは習うと思います。近代言語学の話はだいたいソシュールあたりから始まります。「記号」とは「音声表象 (シニフィアン)」と「概念 (シニフィエ)」が合わさったものであって、その関係は恣意的であると説明されます。私も定期試験の前に同級生といっしょに「記号」について復習した覚えがあります。長らく (私を含めて) 言語研究者はこのことを疑ってこなかったと思います。何を言っているかという、発話をするときには記号を使い、記号を使えば意味も同時に伝達されるという一種のドグマみたいなことです。でも本当にそうなのでしょうか。私がこのことに疑問を持ち始めたのは、二冊 (数え方によっては三冊) の本に出会ったのがきっかけでした。そのうちの二冊は『コトバの<意味づけ論>』 (深谷昌弘・田中茂範著)、もう一冊は『社会システム理論 (上・下)』 (ニクラス・ルーマン著) です。ここで詳しく説明する余裕はありませんが、私が何を感じ取ったのかを簡単に言うと「人間は閉じた体系である」ということです。比喩的に言えば、一人の人間は「一個の風船」と同じだというイメージです。自らを外界に開こうとした瞬間に風船は割れてしまいます。では風船を割ることなく、外界と意味のやり取りをするにはどうしたらいいか、といったことを想像してみることがあります。この議論も長くなるので省略します。あれやこれや考えて、私がたどり着いた結論は「ことばは意味を伝えていない」というものです。意味は外部からの刺激を受けて「風船の中で作られる」ということです。「お前は何を言っているんだ」「それこそ意味がわからない」とお叱りを受けるかもしれませんが、いま私の感覚ではそれが現実のコミュニケーションを観察したときに一番しっくりくる考え方です。

最後に、教育の面でもここ 10 年ほどで考えが変化してきたことがあります。現在私は人間社会科学研究科という場所にいます。この名称は何だかわかりにくいとよく言われます (以後わかりやすいように「文学部」としておきます) が、簡単に言うと語学・文学を専門とする大学院生と学部生を教えています。この環境で教育することが長く続いてきました。近年、私が医療コミュニケーションを研究するようになってから、医療系の学部 (歯学部、薬学部など) で教える機会が増えてきました。そこで感じたことがあります。文学部の学生を相手にするときは、基本的な用語・概念をしっかりと理解して覚えるようにとか先行研究を丹念に調べるようにとか、かなり専門性の高い要求をしてきました。しかし医療系の学部ではそうは

いきません。かれらはまず膨大な量の医療に関する専門知識とスキルを身に付けなければなりません。それなくして国家試験には合格できないという現実があります。そのような状況の中でコミュニケーションを学ぶ学生に対して、従来のような要求をすることはできません。いまは授業の中で「自分自身の日常生活を観察してほしい。日常生活の中で、授業で学んだことが現実に行き起きているんだと気づいてほしい。気づいて初めて腑に落ちるという経験ができる」ということを話しています。もしかしたら、文学部の学生たちにもそう言ってやったほうがよかったのかもしれないと、今さらながら思っています。

いま考えると、さまざまな人、さまざまな本と出会いながら、自身の「言語観」や「コミュニケーション観」が形作られてきたように思います。行き着く先はどこなのかまだわかりませんが、これからも研究を続けていきたいとします。



2022年度 第2回理事会報告

日時：2022年10月9日(土) 13時～

会場：オンラインでの開催

参加者：19名(敬称略)

守崎、高永、松島、宮脇、脇、小西、日高、内藤、今井、宮崎、高井、五島、宮原、水島、會澤、田島、毛利、谷口、吉武

欠席者：2名(敬称略)

小山、松本

議長：守崎(会長)

司会：松島(事務局長)

書記：脇(副事務局長)

会長挨拶

学期が始まったばかりで落ち着かない中、また連休の中日にもかかわらずお集まりいただきありがとうございます。次回の年次大会に向けて、それぞれの部署の方が着実に準備をしてくださっていることにも、改めて感謝申し上げます。今回も様々な議題がありますが、終了時間厳守で進行できればと思っております。ご協力よろしくお願いいたします。

審議事項

[1] 第52回(2023年度)年次大会関連

1. 学術局

(1) 日程調整について

小西学術局長より、第52回年次大会は例年通り6月開催予定であるとの報告があった。具体的な日程について、他学会の日程や基調講演者の都合も勘案して決定したいとの説明があった。審議の結果、日程候補が決まり次第、メール審議によって日程を決定することとなった。

※追記：その後のメール審議(10月28日・29日)によって、第52回年次大会は2023年6月3日(土)・4日(日)に開催されることが決まった。

(2) 基調講演について

小西学術局長より、基調講演を北野宏明氏(ソニーコンピュータサイエンス研究所代表取締役社長)に打診中であるとの説明があった。北野氏はディベートに関する著書もあり、基調講演者としてふさわしいとの結論に至った旨の説明もされた。

審議の結果、北野氏を基調講演者とすることが承認された。

(3) 発表の募集について

小西学術局長より、第52回年次大会向けの募集要項について説明があった。前回理事会において、年次大会での口頭発表を「研究発表」「パネル発表」「企画セッション」の3つに分けることとなった。これを踏まえて、次のような募集要項案を作成した（大きな変更については黄色ハイライト）。

2023 年度大会向け (新)	2022 年度大会向け (旧)
<p>募集①「研究発表」：質疑応答を含む30分程度の、論文発表を前提とした研究発表。</p> <p>募集②「パネル発表」：統一テーマについての90—120分程度の研究発表。</p> <p>募集③「企画セッション」：会員相互の研鑽や情報交換を目的とした90—120分程度の自由企画。形式はパネルディスカッション、ワークショップ、模擬講義など。その他の企画案も可能で、学術局にご相談のこと。</p>	<p>募集①「研究発表」：質疑応答を含む30分程度の、論文発表を前提とした研究発表。</p> <p>募集②「企画セッション」：会員相互の研鑽や情報交換を目的とした90—120分程度の自由企画。形式はパネルディスカッション、ワークショップ、統一テーマの論文発表、模擬講義など。その他の企画案も可能で、学術局にご相談のこと。</p>
<p>○応募資格</p> <p>「研究発表」：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 単独発表の場合は JCA 正会員であること。 2. 共同発表の場合、筆頭著者が JCA 正会員であること。 <ol style="list-style-type: none"> 2.a. 筆頭著者が正会員（一般会員）である場合、著者の半数以上が学会員であること。 2.b. 筆頭著者が正会員（学生会員）である場合は 2.a. の条件は当てはまらない。 3. 共同発表の場合には、筆頭著者が当日の口頭発表代表であること。 <ol style="list-style-type: none"> 3.a. 筆頭著者が正会員（一般会員）である場合、口頭発表者の半数以上が学会員であること。 3.b. 筆頭著者が正会員（学生会員）である場合は 3.a. の条件は当てはまらない。 4. 研究発表を行う JCA 正会員は申込時に 2022 年度までの会費を納入していること。 <p>「パネル発表」：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 司会が JCA 正会員であること。 2. パネルにおける発表が単独発表の場合は、発表者は JCA 正会員であること。 3. パネルにおける発表が共同発表の場合、筆頭著者が JCA 正会員であること。 	<p>○応募資格</p> <p>「研究発表」：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 単独発表の場合は JCA 正会員であること。 2. 共同発表の場合、筆頭著者が JCA 正会員であること。 <ol style="list-style-type: none"> 2.a. 筆頭著者が正会員（一般会員）である場合、著者の半数以上が学会員であること。 2.b. 筆頭著者が正会員（学生会員）である場合は 2.a. の条件は当てはまらない。 3. 共同発表の場合には、筆頭著者が当日の口頭発表代表であること。 <ol style="list-style-type: none"> 3.a. 筆頭著者が正会員（一般会員）である場合、口頭発表者の半数以上が学会員であること。 3.b. 筆頭著者が正会員（学生会員）である場合は 3.a. の条件は当てはまらない。 4. 研究発表を行う JCA 正会員は申込時に 2021 年度までの会費を納入していること。 <p>「企画セッション」：</p> <p>司会が JCA 正会員であること。JCA 会員以外が参加する場合は、応募の際に参加者としてふさわしい理由と参加の正当性を明記すること。JCA 会員は申込時に 2021 年度までの会費を納入していること。</p>

- 3.a. 筆頭著者が正会員（一般会員）である場合、著者の半数以上が学会員であること。
- 3.b. 筆頭著者が正会員（学生会員）である場合は 3.a. の条件は当てはまらない。
4. パネルにおける発表が共同発表の場合には、筆頭著者が当日の口頭発表代表であること。
- 4.a. 筆頭著者が正会員（一般会員）である場合、口頭発表者の半数以上が学会員であること。
- 4.b. 筆頭著者が正会員（学生会員）である場合は 4.a. の条件は当てはまらない。
5. パネル発表にて発表を行う JCA 正会員は申込時に 2022 年度までの会費を納入していること。

「企画セッション」：
司会が JCA 正会員であること。JCA 会員以外が参加する場合は、応募の際に参加者としてふさわしい理由と参加の正当性を明記すること。JCA 会員は申込時に 2022 年度までの会費を納入していること。

審議の結果、上記の募集要項案は承認された。

[2] 各局

1. 事務局

(1) 2022 年度年次大会決算について

宮脇副事務局長より、2022 年度年次大会決算について説明があった。今年度は昨年度同様オンライン開催であったが、新しい試みとして参加費を徴収した。その結果、7,530 円の黒字となったとのことであった。

審議の結果、承認された。

(2) 支部の予算・決算報告について

宮脇副事務局長より、支部大会のオンライン開催が多くなったことで、予算・決算報告がされないままの支部もあるとの説明がされた。今後は「毎年 5 月 GW 明けを目途に、フォーマットに記入するかたちで予算・決算報告をする」というルールを設けたい、とのことであった。

審議の結果、上記ルールの導入について承認された。

(3) EBSCOHost への学会誌収録について

松島事務局長より、資料にもとづいて、2022 年 8 月 3 日に EBSCO からジャーナル収録の依頼があった旨の説明がされた。EBSCO によれば、収録に関して費用はかからず、データ移行作業も EBSCO が行う (CiNii のデータを利用する) ので、本学会に負担は発生しないとのことであった。

理事からは、EBSCO 側のメリットや信頼性について質問があった。これらについて松島事務局長より、先方は日本の学会の掲載誌データを増やしたいようだとの回答があった。また、本学会としてもメリット (CiNii 以外でもジャーナルにアクセスできる) があり、他の学会も多数契約済みであることが説明された。協議の結果、EBSCO への学会誌収録が承認された。

2. その他

高井理事より、JUCA (Japan-U.S. Communication Association) との連携を進めてもよいか旨の提案があった。

理事からは、「連携」の具体的な内容について質問がされた。これに対して高井理事より、具体的な内容については今後協議が必要だが、JUCA 会員の JCA 年次大会参加費を安くするなどが考えられるとの回答があった。

協議の結果、連携を進めることが承認された。

【3】各担当理事

五島理事より、ジャーナルについて提案があった。学術的なレベルを保ちつつも、社会的な貢献に関する報告など、掲載する内容の幅を広げてもよいのではないかとということであった。

小西学術局長からは、たとえば教育実践に関わる調査報告の掲載が考えられる旨の回答があった。一方で、こうした内容をジャーナルではなく学会ホームページに掲載する方法もあるとの指摘もされた。また、学術局や査読に関わる方々の負担も考慮する必要があるとのことであった。内藤副学術局長 (ジャーナル担当) からは、原著論文以外も査読のうえ掲載を認めるのであれば、査読をどのように進めればよいのか検討しなくてはならないとの指摘があった。くわえて、英語論文を査読できる委員を増やさねばならないとの意見も示された。

そのほか理事からは、投稿区分への「研究ノート」追加、査読のあり方の見直し (たとえば建設的なアドバイスを行う)、学会の活動記録媒体としてのジャーナル活用、海外からの投稿促進策、情報発信の強化、研究会の活用、といった意見が示された。

協議の結果、この件についてはワーキンググループを作って検討することとなった。

報告事項

【1】第 52 回 (2023 年度) 年次大会関連

1. 学術局

第 52 回年次大会に向けて、高井理事より、第 51 回年次大会の振り返りがなされた。第 51 回年次大会は参加者が過去 2 番目に多く、オンライン開催の成果とみることができるとの報告であった。

【2】各局

1. 事務局

(1) 入退会者報告

脇副事務局長より、資料にもとづいて、入退会者に関する報告があった。会員数は 294 名 (一般会員 : 281 名、学生会員 : 12 名、準会員 : 1 名) であり、300 名を割って以降ほぼ横ばい状態であるとのことであった。また、会費滞納 (3 年以上) による除名見込みの会員は 7 名であった。

(2) 会費滞納による除名見込みの会員について

引き続き協副事務局長より、会費滞納による除名見込みの会員について説明があった。前回の理事会で、2022年度から、毎年10月の理事会においてこの件(人数)を報告することになった。11月には国際文献社からご本人に督促メールと振り込み用紙を送ることになっている。なお、滞納分の振り込み期限は12月末である。後日、支部長に対象者一覧(データファイル)をお送りするので、支部でも確認をしていただきたいとのことであった。

2. 学術局

(1) 学術賞(書籍部門)の締め切りについて

小西学術局長より、学術賞(書籍部門)の募集要項について説明があった。自薦・他薦を問わないこと、締め切りを2022年12月31日(消印有効)とするとのことであった。

(2) ジャーナル関係

内藤副学術局長より、次のとおり報告があった。

—第50巻特別号について

予定通り発行され、すでに会員の元に届いている。

—投稿規程および執筆要領の変更について

2022年度第1回理事会で承認された執筆要領の変更、およびメール審議にて承認を得た投稿規程の変更について、ホームページ掲載のファイルを差し替えた。

—査読委員会委員について

2022年7月で任期満了となったため、再依頼し、2024年7月までの任期で現在23名が就任している。

—第51巻の進捗状況について

- ・第51巻(2023年1月発行予定)については、掲載論文がないため、2022年6月に開催された第51回年次大会の論考を掲載予定である。掲載を予定しているのは、「基調講演」「シンポジウム」「コミュニケーション理論研究会によるパネル」である。
- ・国際文献社への入稿は10月下旬を予定している。
- ・年間の発行時期が7月と1月に変更されたため、発行までのスケジュールを国際文献社と確認・共有した。

—第52巻第1号への投稿について

- ・第52巻第1号(2023年7月発行予定)には、再投稿論文2本、新規投稿論文8本の提出があった。
- ・再投稿論文は現在査読中である。新規投稿論文は、10月中に査読者を選定し、査読を進めていく。

3. 広報局

(1) ニュースレター131号について

今井副広報局長より、次号となる131号は2022年11月に発行予定である旨の報告があった。

(2) HP への掲載情報

宮崎副広報局長より、次の情報が学会 HP【ニュース】に掲載された旨の報告があった（前回理事会～2022年9月26日：18件）。

- ・2022年09月23日【ニュース】台風14号で被害にあわれた皆さまへ
- ・2022年09月21日【ニュース】教員募集のお知らせ（武蔵野大学）2022年11月25日（金）必着
- ・2022年09月20日【ニュース】「2023年度 米国人フルブライト招へい講師」受け入れ大学募集開始のお知らせ
- ・2022年09月20日【ニュース】教員募集のお知らせ（静岡大学）2022年11月7日（月）必着
- ・2022年09月12日【ニュース】日本コミュニケーション学会中部支部研究会（オンライン）のお知らせ（2022年10月1日（土）13:00-16:30）
- ・2022年09月05日【ニュース】SIETAR Japan オンライン異文化ワークショップのお知らせ：10月1日（土）13:00-16:00
- ・2022年09月02日【ニュース】電気通信普及財団 2022年度下半期助成・援助公募情報のお知らせ
- ・2022年08月26日【ニュース】教員募集のお知らせ（武蔵野大学）2022年10月28日（金）必着
- ・2022年08月22日【ニュース】教員募集のお知らせ（静岡県立大学）2022年10月19日（水）必着
- ・2022年08月22日【ニュース】教員募集のお知らせ（愛知医科大学）2022年9月9日（金）必着
- ・2022年08月09日【ニュース】教員募集のお知らせ（武庫川女子大学）2022年9月6日（火）必着
- ・2022年08月01日【ニュース】教員募集のお知らせ（九州大学）2022年9月30日（金）必着
- ・2022年07月28日【ニュース】教員募集のお知らせ（琉球大学）2022年9月2日（金）必着
- ・2022年07月19日【ニュース】「2022年度電気通信普及財団賞（第38回）」研究論文・著作等募集のお知らせ
- ・2022年07月12日【ニュース】教員募集のお知らせ（立命館大学アジア太平洋大学）2022年8月24日（水）必着
- ・2022年07月08日【ニュース】教員募集のお知らせ（広島工業大学）2022年9月1日（木）必着
- ・2022年06月14日【ニュース】『日本コミュニケーション研究』論文投稿締切日変更のお知らせ
- ・2022年05月24日【ニュース】「NHK番組アーカイブス学術利用トライアル」2022年度後期公募のお知らせ

(3) ML/Twitter での情報発信について

今井副広報局長より、ML と Twitter にて会員向けに周知された情報について、次のような報告があった。

- ・HP 掲載情報のうち、会員向けに共有すべきものに関しては ML にて配信をおこなっている（前回理事会以後 20 件）。
- ・HP 掲載情報、およびそれ以外の情報（会員の新刊情報等）を含め、学会公式 Twitter をつうじて発信をおこなっている（前回理事会以後 3 件）。

(4) NL 担当の運営委員の追加について

今井副広報局長より、広報局におけるNL担当の運営委員として、齋藤光之介氏（法政大学大学院政策創造研究科修士課程在籍）を追加したとの報告があった。

(5) 支部ホームページが検索対象とならない問題について

宮崎副広報局長より、現在、Googleで支部ホームページが検索できない（検索結果として出てこない）状況にあることが報告された。ブラウザによっては検索可能だが、原因は不明とのこと。

【3】各担当理事

1. 理事会運営に関する協議の結果報告

宮原理事会運営担当理事から、資料にもとづいて「理事会運営方針協議ミーティング」（2022年度年次大会以降4度開催）の結果が報告された。

—年次大会開催スケジュールについて

例年、6月に開催する年次大会の会場（大学）について、会場（大学）の規則との兼ね合いで4月にならないと使用可能かどうかの最終決定が出ない。このことが学術局等に大きな負担となっていることを考慮すると、学会全体でスケジュールの見直しをする必要がある。については、以下の提案をしたい。

- ・会長主導で数年先（3～5年程度）まで開催地を決める。ただし、開催大学まで決めるのは困難だと思われるので、開催する地域、および開催に関わる支部のみ決める。
- ・年次大会に関する副会長（学術担当）の業務を整理する。
- ・各地域で会場候補（大学とは限らない）を選定する。
- ・会場視察の次期を早め、査読・選定後の2月下旬～3月上旬にする。
- ・会場視察のメンバーを会長・副会長（学術担当）・学術局長・大会委員長・事務局長に固定する。

—会長・理事の選出方法について

会長がどのようにして選ばれているのかについて会員への透明性を確保できておらず、そのことが会員サービスに影響を与え、会員の増加を妨げる一因になっている可能性を憂慮すべきという点で合意を得ることができた。また今後、透明性や求心性を増すことにつながる方法で会長を選出すべきという点でも考え方は一致した。一方で、他の学会の運営方針などを参考にしても、選挙は必ずしもプラス面ばかりが期待できるものではないことから、選挙ありきの議論を進めるべきではない、という点でも合意した。

会員全員が投票する一般選挙を実施した場合、選ばれた会長が必ずしも学会運営の長としてふさわしい人物とは限らない。また、選ばれはしたものの学会を率いることに強い意志を持ち合わせていない可能性もある。さらに、そのようにして選ばれた会長が、副会長や理事をどのようにして選出し任命するのか、事務局・学術局・広報局の長や局員との連携についても憂慮すべき事態が起りかねないことを考えると、会長の選出については透明性に加えて、継続性が重要である。

これらのことを念頭に、次期会長を選挙によって決めるのであれば、以下の方法が妥当ではないかという結論に達した。

- ・支部長を通して各支部から1名の候補者を会長宛に推薦する。その際「該当者なし」という支部からの回答も認める。
- ・同時に一般会員からの立候補者を募集する。
- ・各候補者は「所信表明」（様式を作成し、長さを決める）を期日までに会長宛に送る。
- ・候補者の中から理事による互選で会長を決める。
- ・副会長、局長、理事は会長が選出する。

なお、今回の案は、次回理事会（3月）で詳細な検討を行うためのたたき台である。2023年度第1回理事会（6月頃）で選挙方法を決定し、同年10月頃に選挙管理委員会（仮）を設ける予定とのことであった。

【4】各支部報告

各支部報告を参照。

【5】次回理事会開催日時・会場

2023年3月5日（日）、3月12日（日）を候補として、後日調整することになった。オンライン開催（Zoom）。

※追記：日程調整の結果（10月20日付）、第3回理事会は2023年3月5日（日）午後1時から開催されることになった。

学術局からのお知らせ

学会誌に関するお知らせ

2023年1月に『日本コミュニケーション研究』(*Japanese Journal of Communication Studies*)第51巻が発行されました。現在は、第52巻第1号(2023年7月発行予定)の準備が進められています。また、**第52巻第2号(2024年1月発行予定)の原稿を募集**しております。締め切りは、**2023年3月31日(金)**となっております。変更等が生じた際にはホームページに掲載いたしますので、最新情報をご確認のうえご投稿いただきますようお願い申し上げます。

ご投稿の際には、ホームページにある最新の「研究論文集投稿規程」「学会誌執筆要項」をご参照いただき、投稿資格や研究倫理、書式等をご確認のうえ、ご投稿いただけますようお願い申し上げます。ご提出は、ワード等で作成された(1)「論文」、(2)「シノプシス」、(3)「著者情報およびファイル作成に使用した機種等の情報」の3つのファイルをメールに添付して、指定メールアドレスに送付するという形をお願いいたします。また、原稿を送付される際には、ジャーナル専用アドレスに加え、編集委員長のメールアドレスにも「CC:」で送付をお願いいたします。メールアドレスは以下の通りです。

To: journal[@を入れる]ml.jca1971.com

CC: itnaito[@を入れる]ed.tokyo-fukushi.ac.jp

上述したメール投稿で受領の返信がない等の不具合、また、ジャーナル投稿に関するその他のお問い合わせは、ジャーナル担当の内藤(itnaito[@を入れる]ed.tokyo-fukushi.ac.jp)までご連絡ください。可能な限り迅速に対応致します。

皆様のご投稿を心よりお待ちしております。

(副学術局長：ジャーナル担当 内藤 伊都子)

事務局報告

事務局からのご報告とお願い

1. 学会事務局のメールアドレス変更のお知らせ

この度サーバー刷新に伴い、メールアドレスが以下のように変わりますのでご連絡いたします。

旧メールアドレス：jcom-post[@を入れる]bunken.co.jp

新メールアドレス：jcom-post[@を入れる]as.bunken.co.jp

旧アドレスは2023年12月まで確認可能となっておりますが、お早めの変更をお願いいたします。

2. マイページの利用について

2019年12月から「マイページ」（会員情報管理システム）が利用できるようになりました。マイページの中で「会費納入状況の確認」「会員情報の検索」「会員情報の変更・確認」などができます。新しいHPの右上のバナーからログインできますので、記載内容の確認・登録・更新をお願いいたします。マイページへのアクセスに必要なIDとパスワードは、年会費の請求書と一しょにお送りしております。「お振り込みに関するご注意」の欄に〈マイページのご案内〉がありますのでご覧ください。もしこの用紙を紛失なされた場合には、日本コミュニケーション学会事務局（以下「学会事務局」とする）までお問い合わせください。

問い合わせ先：日本コミュニケーション学会事務局

jcom-post[@を入れる]as.bunken.co.jp

3. 住所等変更届のお願い

住所や所属が変更になった場合には次のいずれかの方法で手続きをしてください。

- (1) 日本コミュニケーション学会HPにある「マイページ」にアクセスし「会員情報の変更」を選択して必要事項を更新してください。メールアドレスの更新も「会員情報の変更」内で行うことができます。
- (2) 学会事務局までメール、郵送、ファックスのいずれかでご連絡ください。

4. ジャーナルバックナンバー、記念図書の購入申込みと閲覧・複写申込み

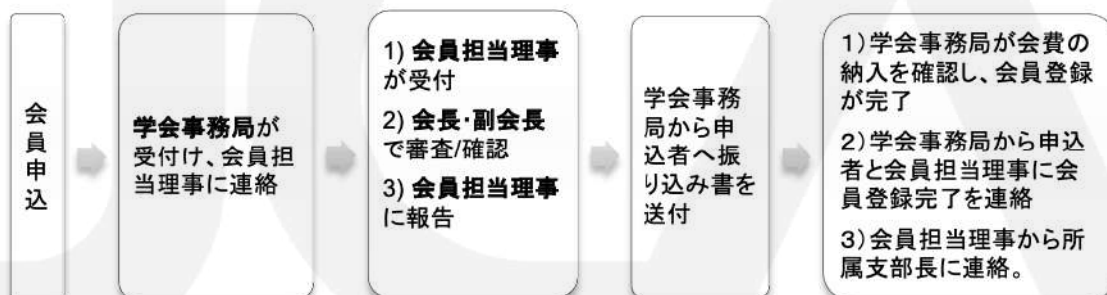
これまで発行されたジャーナルバックナンバーなど学会発刊物を購入されたい場合は、学会事務局にお問い合わせください。また、科学技術情報発信・流通総合システムJ-STAGE

(<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja/>) あるいは国立情報学研究所の論文情報ナビゲータCiNii (<http://ci.nii.ac.jp/>) やCiNii Research (<https://cir.nii.ac.jp/?lang=ja>) にも論文が掲載されており、閲覧・印刷することができますので、こちらも是非ご利用ください。同サービスを利用せずに複写をご希望の場合は、学会事務局までお問い合わせください。

5. 新規会員の手続き

JCAでは新しい会員を随時受け付けています。次頁のような流れで、新規会員の手続きを行います。ご不明な点がございましたら、学会事務局までご連絡ください。皆様のご協力をお願い申し上げます。皆様のご協力をお願い申し上げます。

【会員申込から会員登録完了までの流れ】



広報局便り

1. 新刊情報提供のお願い

広報局としては、会員の皆様の新刊情報を学会公式 Twitter(@jca_1971)およびML で発信・配信していきたいと考えております。自薦、他薦を問わず、新刊のご著書に関する情報をお寄せいただきたく、お願い申し上げます。ぜひ、ご検討ください。

※学会ホームページに記載されている「基本方針」に合致しないものに関しては、学会公式 Twitter 等での発信をお断りする場合がございます。ご了承下さい。

<http://jca1971.com/keynote>

2. 広報局からのお知らせ

- ① 広報局では ML をもちいて、学会 HP における掲載情報を中心に会員の皆様あての情報配信をおこなっております。それらが届いているかをご確認いただいたうえで、もし不達の場合には、JCA ニュースレター今号 23 ページのご案内をご参照いただき、マイページへの登録手続き/メールアドレスの更新をお願いいたします。
- ② 広報局では各支部や各研究会の情報、他学会や教員公募などの情報も、ホームページにアップロードしていきたいと考えております。ぜひ、情報をお寄せください。
- ③ 皆様からも、国内だけでなく、海外の学会を含めて関連する講演会や研究会があれば情報として広報局までご一報下さい。ホームページにアップロードしたいと思います。
- ④ ホームページ (<http://jca1971.com/>) は、適宜更新しております。ご意見やご質問を頂ければ幸いです。
- ⑤ JCA 公式 Twitter(@jca_1971)も適宜更新しております。是非フォローをお願いいたします。

(広報局長 松本健太郎)

JCA ニュースレターへのご寄稿のお願い

日本コミュニケーション学会では、ニュースレターへの会員の皆様のご寄稿を募集しております。以下の要領で奮ってご寄稿ください。宛先：今井達也 (imatatsu.jca[@を入れる]gmail.com)

① 著書紹介

会員の皆様の著書を紹介するコーナーです。自薦、他薦を問わず、会員の皆様の著書をご紹介ください。和文・英文で1枚程度（A4）の原稿を受け付けております。

② コラム：コミュニケーション教育

コミュニケーション教育に関する実践報告、事例紹介、展望、論考、その他のエッセイを受け付けています。

和文・英文で1枚程度（A4）の原稿を受け付けております。

③ 書評

コミュニケーションおよび関連領域の著書に関する書評を受け付けております。

和文・英文で1枚程度（A4）の原稿を受け付けております。

④ NL 表紙の写真

ニュースレターの表紙を飾る写真を募集しております。本学会のNL表紙に相応しい写真がございましたら是非お寄せください。（写真は、会員の皆様ご自身でお撮りになったもの、または著作権をお持ちの写真に限ります。また、写真内容が法令に触れないようご配慮ください。）

支部ニュース


東北支部


(支部長 會澤 まりえ)

2022年12月3日(土)に東北支部第23回研究大会をオンライン(Zoom)で開催しました。今回は、日程の都合で昨年度のように大学英語教育学会との合同大会とはなりませんでしたが、3つの研究発表がありました。まず、一つ目は、「新学習指導要領における中学生の英語学習ー考えて話す力の養成とアクティブラーニングの観点からー」と題して、宮曾根郁さん(明星大学通信教育課程履修生)と宮曾根美香先生(東北工業大学)によるもので、二つ目は、「アサーティブ・コミュニケーションをめぐって」と題して會澤まりえ(尚絅学院大学)が行いました。三つ目は、「医療現場をつないだ3者通話による通訳対応の課題」と題して川内規会先生(青森県立保健大学)によるものでした。参加者は7名でしたが質疑応答が活発に行われ、実り多き大会となりました。今回、嬉しいことに支部メンバーが増え支部メンバーの平均年齢が若返りました。

今年度の春の研究会は3月18日(土)開催となりました。よって、研究発表申し込みは2月18日(土)です。当日のプログラムは、東北支部ブログ(<http://tohokucajjugem.jp/>)にも掲載します。参加希望の方は、會澤(aizawa[@を入れる]shokei.ac.jp)までご連絡下さい。



2022年12月3日に開催された
東北支部第23回研究大会


関東支部


(支部長 田島 慎朗)

支部研究会を以下の要領で開催いたします。

テーマ：「コミュニケーション学の今とこれから」

日時：2023年3月19日(日曜) 10:00～12:00

場所：立教大学 12号館地下第1・2会議室
Zoom 同時開催

今回は、昨今のJCA年次大会におけるコミュニケーション学の「現在知/現在地」と「未来」の議論を受けて、それをさらに発展・刷新させることをテーマとしたパネルディスカッション形式にしています。ディスカッションでは、まずコミュニケーション学の各分野でご活躍の先生方から、ご専門の領域の現状とこれからの動向についてお伺いする機会を設けます。その後、参加者の皆様とのディスカッションに多くの時間を割きます。登壇者は以下の先生方です。

守崎 誠一 先生(関西大学)

師岡 淳也 先生(立教大学)

松本 健太郎 先生(二松學舎大学)

参加申し込み先 <https://shorturl.at/aB489>

or



詳しい内容については、別途広報担当の方を通じて、デジタル・フライヤーのかたちで皆様方にお届けいたします。

Zoom 開催としておりますが、会議室でも同時に開催し、関東を中心とした皆様と久々にお会いできる機会にもしたいと思っております。皆さま、どうぞふるってご参加ください。

中部支部

(支部長 毛利 雅子)

2022 年度中部支部例会 (第 2 回) は、2023 年 3 月 4 日 (土曜日) に愛知淑徳大学で開催予定です。詳細は現在協議中ですので、プログラムについては中部支部にお問い合わせください。

関西支部

(支部長 小山 哲春)

関西支部では、2022 年度関西支部大会は 2022 年 11 月 20 日 (日) にオンライン (Zoom) で開催しました。「ビブリオバトル」「記号創発口ポティックス」等の分野で著名な谷口忠大先生を講演者としてお招きし、延べ 10 名の会員・非会員の皆様にご参加いただき、基調講演後の関西支部名物?の長時間ディスカッションも多いに盛り上がり、大変実り多い大会となりました。

【タイムスケジュール】

9:30-10:00 支部総会

10:10-11:10 講演

11:20-12:20 質疑応答・ディスカッション

【講演者】 谷口 忠大 先生 (立命館大学)

【講演タイトル】「コミュニケーション場のメカニズムデザイン～自律分散的な主体の「目に見えない環境」を設計する～」

なお、最初に支部総会を開催し、支部長から 2021 年度の事業報告および 2022 年度事業計画が報告され、出席の支部会員から承認を得まし

た。引き続き、野島晃子先生より 2021 年度決算報告および 2022 年度予算案が報告され、同様に承認を得ました。

また、関西支部では、春期研究会を 2023 年 4 日 (土) に、関西大学梅田キャンパスにて、2 年半ぶりに！対面で開催することを決定いたしました。大会テーマは「私が薦めるこの一冊」、参加者の皆様からコミュニケーションの理論や実践に関する推薦書籍・論文を発表・共有いただく企画を計画しております。詳細は HP、NL 等でご案内いたしますので、皆様是非ご参加ください！

中国・四国支部

(支部長 谷口 直隆)

第 25 回支部大会についてのお知らせ

中国四国支部では、第 25 回支部大会を以下の要領で開催いたします。

中国四国支部 第 25 回支部大会

日程：2023 年 3 月 4 日 (土) 13:00~15:00

形式：オンライン (Zoom) 参加費：無料

今回は、特にテーマを定めず、自由研究発表を中心に開催いたします。ご発表・ご参加を検討いただけますと幸いです。対面開催も検討いたしましたが、年明けからの状況に鑑み、今年度もオンライン開催とさせていただきます。

「今年度も」が「今年度まで」となることを祈りつつ、会員の皆様の参加の状況も踏まえて、オンライン開催継続も検討していきます。

発表の申し込み及び参加申し込み、ご質問につきましては、広島修道大学 谷口：(ntaniguc [@を入れる] alpha.shudo-u.ac.jp)までご連絡ください。

発表申し込み締め切り：2 月 24 日 (金) 17:00

参加申し込み締め切り：3 月 3 日 (金) 17:00

九州支部

(支部長 吉武 正樹)

♪春はお別れの季節です みんな旅立っていくんです とは、おニャン子クラブ「じゃあね」(1986)のイントロ。卒業する会員番号5番のなかじ(中島美春)が(今でいう)センターを務めた、卒業ソングです。このニュースレターが届くころにはゼミ生の卒論発表会も終わり、「別れ」と「旅立ち」を嬉しさ半分、寂しさ半分の気持ちで待っているころだと思います(この原稿を書いている今は、卒論が本当に終わるのか気が気でありませんが…)。

さて、今年度も無事に、九州支部の活動を終わることができました。残すところ、3月発行予定の九州支部ニュースレターのみ。それでは今年度最後の九州支部の支部報告。Here we go!

まず12月11日(日)、第29回九州支部大会をオンライン開催しました。「幸せとコミュニケーション」という大会テーマのもと、ライターの堀内都喜子先生をお招きし、「フィンランドー幸福度ランキング1位の背景にあるもの」と題したご講演をいただきました。今でこそ幸福度ランキング1位で知られるフィンランドですが、昔からそうだったわけではなく、国としてそう変わっていったそうです。変わるには変わる勇気が必要ですが、そのためにまずは他者を「信頼」できなければならない。コミュニケーション学的思考が刺激される1時間でした。堀内先生の講演記録は、来年度発行の『九州コミュニケーション研究』第21号に掲載予定です。お楽しみに。



第29回九州支部大会参加者との記念写真



堀内都喜子先生による基調講演

基調講演に続き、4つの研究発表がありました。大会テーマや基調講演を設ける面白さの一つに、研究発表をその切り口から再解釈できることがあります。それぞれの発表において、直接的、間接的に「幸せとコミュニケーション」について考えることができました。おかげさまで計21名の参加があり、盛会に終わることができました。ご参加いただいたみなさん、ありがとうございました。



友池梨紗先生(愛知淑徳大学)の発表の様子

次に、支部紀要『九州コミュニケーション研究』第20号を10月に発行しました。特別企画「ポストコロナの教育とコミュニケーション」に寄稿された5本の論文に加え、研究発表論文1本、研究ノート1本を掲載しています。また、11月にはニュースレターNo.39を発行しました。支部紀要、ニュー

ズレターとともに九州支部ホームページにて閲覧可能です。どうぞご覧ください。

<http://kyushu.jca1971.com/>

毎度のことながら書きすぎてしまいましたが、最後に一言。この度支部長としての2期目を終えることとなり、わたくし、吉武正樹は九州支部長を卒業します！支部報告の執筆も今回で最後。毎回九州支部だけ馬鹿のように長く、内容も口調もふざけすぎ。そんなお咎めも皆無で、いつも自由に書かせて

もらいました。4月からは新しい体制になりますが、引き続き九州支部をよろしくお願いします。

冒頭に紹介した名曲「じゃあね」ですが、最後はこう終わります。♪四月になれば悲しみはキラキラした思い出 卒業生たちはともかく、私自身はキラキラ云々というより、別の役割で支部にお仕えることになりそうです。なかなか「普通の男の子」に戻れる日は来ないようですね…。

連絡先

〒162-0801

東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター

日本コミュニケーション学会事務局

Tel: 03-6824-9372

Fax: 03-5227-8631

[jcom-post@\[@を入れる\]bunken.co.jp](mailto:jcom-post@[@を入れる]bunken.co.jp)



マイページ登録のお願い

日本コミュニケーション学会 広報局

1. マイページの利用開始について

マイページでは「会費納入状況の確認」「会員情報の検索」「会員情報の変更・確認」などができます。新しい HP の右上のバナーからログインできますので、**できるだけ早い時期にアクセスしていただき、記載内容の確認・登録・更新をお願いいたします。**マイページへのアクセスに必要な ID とパスワードは、年会費の請求書と一緒に送っております。「お振り込みに関するご注意」の欄に〈マイページのご案内〉がありますのでご覧ください。もしこの用紙を紛失なされた場合には、日本コミュニケーション学会事務局（以下「学会事務局」とする）までお問い合わせください。

問い合わせ先： 日本コミュニケーション学会事務局
jcom-post[@を入れる]bunken.co.jp

2. 住所等変更届のお願い

住所や所属が変更になった場合には次のいずれかの方法で手続きをしてください。

- (1) 日本コミュニケーション学会 HP にある「マイページ」にアクセスし「会員情報の変更」を選択して必要事項を更新してください。メールアドレスの更新も「会員情報の変更」内で行うことができます。
- (2) 学会事務局までメール、郵送、ファックスのいずれかでご連絡ください。

編集後記

今回の編集にあたり、昨年同時期に発行されたニュースレターを読み返しました。まだその頃は、ほとんどの記事が新型コロナウイルスについて触れており、今回みなさまに書いていただいた記事とは違った様相であったことを思い出しました。新型コロナウイルスが様々な影響により、社会における注目を失ってきているのを感じます。私自身このウイルスに大きく振り回されていたので、そのような状況に安堵しています。しかし、新型コロナウイルスがコミュニケーションに与えている影響は今もまだ強大なものだと感じます。このウイルスやワクチンへの考え方により、人々の中には大きな分断を孕んだままです。後遺症を患っている人の中には、スティグマを経験している人もいます。私達人間は、新型コロナウイルスにより大きなダメージを与えられましたが、その中でもコミュニケーションのあり方は進化したのではないのでしょうか。対面でのコミュニケーションが制限されていても、新たなコミュニケーションのあり方でこの苦境を乗り越えてきました。そんな進化した私達ならば、新型コロナウイルスによってもたらされた人間関係の問題に柔軟に対応していけるはず。そのためにコミュニケーション学ができることは少なくないと思っています。

広報局 ニュースレター担当 今井 達也